

**白**楽天(白居易、772～846)は唐の代表的な詩人で、著書『白氏文集』は『源氏物語』をはじめ、平安時代の文学作品に大きな影響を与えたと言われます。4千にもおよぶ詩文の中には、有名な「長恨歌」——寵妃の楊貴妃を失った玄宗皇帝の悲しみを詠んだもの——もあります。

玉容寂寞淚欄干、梨花一枝春帶雨 (玉容寂寞として涙欄干、梨花一枝春雨を帯ぶ)

それから『白氏文集』は詩だけに終わりません。「池亭記」という章では別荘の設計や築庭にも触れているように、白楽天は優れた建築家・造園家でもあったのです。ですから『白氏文集』は、より広い意味合いで、平安朝の貴族層にとっての憧れ・お手本となったわけです。

権勢を誇った藤原道長も、そうした貴族の一人でした。彼の別荘といえば、後に平等院となった宇治のものが有名ですが、桂川沿いに造営された桂家かつらやも注目されています。と申しますのも、『源氏物語』の「松風」の巻に登場する「桂殿」(桂の院)と呼ばれる源氏の別荘は、この道長の別荘がモデルとなったと見られるからです。『白氏文集』の愛好者であった道長のことですから、同様の世界を再現すべく造営したものと思われまゝ。その道長を主人とした紫式部が刺激を受けたのも自然な成り行きで、こうして、『白氏文集』の世界は『源氏物語』の中に投影されたのです。

今日はなほ桂殿に、とて、そなたさまにおはしましぬ。俄にわかなる御饗応あるじと騒ぎて、  
鶺鴒ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。

(頭の中將たちが)「今日は、やはり桂殿に」といって、そちらの方へいらっしゃった。桂の院では急な御饗応ということで大騒ぎになり、鶺鴒どもを召したところ、あの明石の海人の意味の分からぬおしゃべりが自然と思い出されなさる。

ところで、この桂殿の所在地は物語では明示されていませんが、おそらくは桂川のほとりかと推定されており、そのことは、源氏宛に贈られた冷泉院からの歌で確かめることができます。

月の澄む 河の遠なる 里なれば 桂の影は のどけかるらむ

(そちらは月の澄む川向こうの人里ゆえ、月の光はのどかなことであろう)

歌に表わされているように、桂川(大堰川)流域一帯は月見には絶好の地と言われていました。源氏も詩歌管弦の宴を催しては名月を鑑賞し、時には舟を出して鶺鴒見物に興じたようですね。今日においても、桂川流域と申しますか嵯峨野一帯は、嵐山の渡月橋界隈や大覚寺・広沢池など、名月鑑賞の地として有名です。昔は闇が深かっただけに、月明かりも冴えたと思いますねえ。

**道**長の別荘も時を経て朽ち果て、一帯は瓜畑が広がる近衛家の所領となっていたようです。戦国時代になると、細川幽斎、古田織部、そして豊臣秀吉の支配地へと移っていきました。そして、秀吉と淀君との間に実子(鶴松)が生まれたことにより、この地の状況が変わりました。

秀吉には前年に養子となった智仁親王としひと おうぎまち(正親町天皇の長男・誠仁親王の子)が居ましたが、実子が生れたために養子縁組を解消され、新たに八条宮を創立することになりました。その際に上記所領が与えられ、親王は別荘を営なむわけです。造営は長男智忠親王さねひとの代まで約50年間、3次にわたるものでしたが、これが今日の桂離宮の始まりとなるのです。

それにしても、鶴松は間もなく夭折してしまったわけですから、八条宮の創立も別荘の造営も秀吉の個人的理由の産物でしたね。しかし、『白氏文集』の愛好者であった智仁親王にとっては、源氏物語の世界を再現させることに挑めたのですから、案外と幸福であったかも知れません。

# 桂

離宮は江戸時代前期の代表的な数奇屋建築として著名で、国宝にも指定されております。しかし傷みが激しくて、昭和51(1976)年より6年間、**昭和の大修理**が実施されました。こうした大修理の際には学術調査を併せて行なうわけですが、それによって貴重な発見や確認がいくつも出て来ました。そのうち主要なものを挙げますと以下のような点です。

- ①小堀遠州(幕府の普請奉行)が造営にも関与したと見られていたが、その可能性は低い。
- ②従来は「**簡素な美**」が喧伝されてきたが、実際には人工の精緻を極めた例が多く見られる。
- ③**月見**を強く意識した建物や園池の構造であり、その目的に沿った配置が施されている。

①については解体修理の成果ですが、補修や増築の跡を見ると、およそ設計・建築のプロでは考えられない稚拙な施工がなされていたからです。おそらく、智仁・智忠の父子二代にわたって古典の世界を再現することに心を奪われた結果なのでしょう。逆に言えば、精神性と申しますか憧れや遊びの心が感じ取れるわけで、一部の隙も無いというような堅苦しさととは別物です。

②については、全体としては日本の家屋に共通するような開放的で簡素な造りが印象的です。極論すれば、木と紙だけで出来た、華美な装飾がほとんど見られない質実な感じがいたします。しかしながら、襖の引き手や、欄間・窓などのちょっとした意匠などは、ここまで気を配るかと思われるほど細部に手を入れており、その多くは「**月**」が**動機となっている**のも事実です。

③については最大の特徴で、この別荘は月見のためにあると言っても過言ではありませんね。夏の湿気を避けるために高床であるのは珍しくはありませんが、ここの床は異常に高い。軒下は短く切られていて、中空を見るためであることは明白です。さらに驚くべきは部屋の向きでして、真東ではなく僅かに東南を向いて開かれており、この理由も他ならぬ月見のためと思われます。科学的に調べたところ、当時の**中秋の名月が出る方位にピッタリと合わされている**そうです。

# 月

の桂というのは古くからの歌枕です。『古事記』に「湯津桂」の名で登場するのが最初で、これは「神聖な桂の木」を意味し、その実を食べれば永久の生命が約束されるものです。

また、中国の隋に「月桂伝説」というものがあります。これは月の中に高さ五百丈(1,125m)のカツラという木があり、仙人が斧で伐っている姿が月面に見えるという内容です。伝説の意味は「目には見えながら手に取ることはできない」という譬えで、神聖で高貴なものを示しています。


日本においては、桂川流域の平野を開拓した秦氏が、この伝説に因んで地名として名付けたと言われています。また、『万葉集』には次のような歌が詠まれてもいます。

目には見て 手には取られぬ 月の内の <sup>かつら</sup> 楓のごとき 妹をいかにせむ




ところで、月見といえば**旧暦八月十五夜の中秋の観月が最上**のものと言われます。この風習は中国の宮廷から伝わったもので、日本での始まりは平安時代とされます。諸説あるようですが、島田忠臣という人物が貞観4年(862)に観月の宴を開き、宮中の宴は宇多天皇の寛平9年(897)、あるいは光孝天皇の仁和元年(885)から始まったようです。この時代には、漢文学の隆盛と併せて国文学が発達し、とりわけ「**かな文字**」の発明によって和歌を詠むことが流行したものですから、観月の宴というのは格好の機会を提供したであろうと思われまます。

尚、今日行なっているような供物(御神酒・芋・団子・ススキ)を供えるのは、室町時代からと言われています。**農耕儀礼の一つと思われまます**が、米作よりも畑作の色が濃いですね。


ルーノ・タウトはドイツ人建築家ですが、かのヒトラー政権が誕生した際に祖国を離れ、昭和8年（1933）5月3日に来日しました。招いたのは日本建築界の有志による団体で、来日翌日（タウトの53回目の誕生日）には、その案内で初めて桂離宮を訪れたのです。

ところが、この招聘は双方に失望をもたらしました。と言うのも、招いた側としてはタウトを西洋モダニズムの旗手として考えており、日本に新風を起こすように期待していたわけですが、タウト自身は桂離宮をはじめ伝統建築に入れ込んでしまう有り様だったからです。彼にすれば、**自然と調和した日本建築の簡素で軽快な様子**は、むしろ理想像に近いものものと映ったのです。「心を和ます親しさ」、「眼は精神的なものへの変圧器だ。日本は眼に美しい国である」と賞賛し、「泣きたくなるほど美しい印象だ」と述べ、周りの日本人の方が驚いたほどでした。

結局、タウトには建築家としての仕事が回って来ずに、彼自身はやむなく建築関係の文筆業に精を出したわけです。その甲斐あって、『**日本美の再発見**』をはじめ優れた著作を残しましたが、建築家としては評価されないまま、3年半の滞在の後に失意の離日となったわけです。

ところで、タウトは伝統的な建築物なら何でも評価したわけではありません。「**桂離宮では眼が思惟する**。修学院離宮では眼は見る。桂と同時代に造営された日光では、眼はやがて見なくなり、一切の思惟は止む。桂離宮では眼は思考と芸術との、或いは哲学と現実との媒介者である」という言葉は有名で、日光の東照宮は評価が低いようです。「日光は威厳があるが、親しみが持てない。これは**イカモノ**だ。」とも言いました。「イカモノ」とは「いかさま、インチキ、まがいもの」という意味なのですが、酷評というか、ものすごい表現ですね。 

余談ながら、タウトはユダヤ人であるためにナチスに追われたと信じられていたようですが、それは全くの誤りです。彼はユダヤ人ではなく、れっきとしたドイツ人です。この原因となると彼は当時のドイツが敵視していたソ連政府から招かれ、モスクワ都市計画に参加していたため、反体制的な危険分子と見られたのかも知れません。彼は妻と二人でベルリンを発ったのですが、残された家族に対しては祖国逃亡税が課されたそうです。さらに、奇しくも同じ日にベルリンを脱出した**アインシュタイン**——正真正銘のユダヤ人で、米国に亡命——の印象が強かったことも手伝ったと思われます。日本滞在中、タウトはこの件でも大いに悩んでいたと伝わります。

条宮は11代<sup>すみこ</sup>淑子内親王の時(明治14・1881)に途絶え、当別荘は忘れられた存在でした。江戸時代に刊行された名所案内書でも掲載されることは稀で、代表的な『都名所図会』には記載されていません。この老朽化も著しい別荘を救ったのは、**北垣京都府知事**と公家**岩倉具視**の二人でした。彼らは**別荘を皇室財産(離宮)にして維持保全を図った**わけで、二条城も同様です。もしも編入が無ければ、タウトによる発見や賞賛も考えられず、まさに恩人と呼べますね。

それにしても、日本美の代表例とされる桂離宮も始まりは個人の別荘で、しかも建築の素人がほとんど憧れ一本で造営したものです。それが究極のレベルに到達するわけですから、憧れとは専門的な理論などを超えてしまうものかも知れません。並外れた感性が全てとは言いませんが、タウトが圧倒されたのも、そうした精神的なものによる作用だったのではないのでしょうか。

今日では照明が発達したために、闇とか月明かりを尊ぶような感受性は薄らいだようですが、どうでしょうか、日照権ならぬ「月照権」を要求するくらいの話があっても面白いですね。